

### Ⅲ テーマ 「福祉体験」の実際

## 1. 体験を生かした総合学習

—「老人の方の入浴介助に挑戦しよう」を通して—

奥村 泰 磨

#### 1. 講座の基盤

##### (1) 講座設定の理由

現在、松江市の65才以上の老人は約2万人、およそ4人に1人に割合となる。25年後には2.5人に1人の割合になるという。来たるべき高齢化社会などという見出しをよく見たり、聞いたりする。21世紀を生きる生徒達にとって、老人福祉の問題はさけては通れない課題の1つといえよう。この課題は決して未来だけの課題ではなく、現在の課題でもある。そこで、老人福祉を1つの窓にして福祉についての確かな自分なりの考えを持ち、さらには、それと自分との関わりを考えるなかで自己認識を深めることができると考え、この主題を設定した。

##### (2) 学習活動の工夫

- ・ 入浴介助前に車イスの操作などの技能面や職員の方によるお話しや施設の見学などで知識面・心情面を高めるようにした。
- ・ 介護されている人との触れ合いを単に入浴介助だけにせず、朝の車でのお迎えや入浴前の接待、お世話、入浴後のお世話（爪切り、髪の毛の乾燥、耳掃除）など4時間以上にわたり、全般的にした。
- ・ 体験の当日は、センターの朝礼から参加し、十分に職員の方とも触れ合うようにした。
- ・ 入浴介助体験や発表のまとめなどはお互いの考えや感想が率直に出せるよう小集団にした。

#### 2. 体験を核にした学習計画

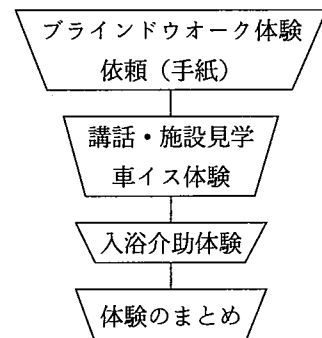
##### 学習活動の重点

学習活動の重点は、在宅福祉サービスセンターを利用されている老人が入浴されるときに介助体験である。その体験をより確かなものにするため、知識面、技能面、心情面から3つの手だてを取り入れた。まず、老人デイサービスの必要性や内容などをセンターの職員の方から直接指導してもらう。さらに施設の見学もする。そして車イス

の操作を体験をとおして、学習する。それらをもとに、4班に分かれて、入浴介助の体験をする。この体験は朝の会の参加、迎車に同乗して、車の乗降介助、入浴前後のお世話なども含む。

#### 3. 体験を生かした学習の実際

##### 学習計画表



協力していただいた施設は松江市在宅福祉サービスセンター「デイホームちどり」。住所は松江市千鳥町71番地（電話27-3755）その施設職員の諏訪方宣さんに外部講師として協力いただいた。

##### (1) デイホームちどり訪問

半数は自転車で、半数は車にて到着。4階の集会室に集合する。諏訪さんのお話を聞く。松江市の現状や今後の課題、施設の様子やその目的、さらに1日のながれなどを詳しく説明してもらう。その後各階の施設



諏訪さんから介助機器の説明を聞く生徒たち

を見学した。入浴施設では、車イスのまま入浴できるスロープ付きのお風呂を見学。重度の方のためのお風呂に入るのではなくバスタブが持ち上がるお風呂を見学し、生徒は驚いていた。入浴者の不安をやわらげるためと説明を聞き、感心していた。

その後、車イスの実習をする。はじめに諏訪さんのお話を聞く。「ねたきり老人は外国の人からは、ねかせきり老人と皮肉られている。」と聞き、あらためて日本の福祉の遅れを知る。車イスも大きさだけでなく使用する人に合わせて何種類もあり、生徒は驚いていた。実習では、利き腕に応じ、片足・片手で操作に思いのほか苦勞する。車イスの介護では段差の時かなり心配りしないと恐怖感を与えることを身をもって実感していた。



入浴後、爪切りの介助をしている生徒

## (2) 入浴介助体験

人数の関係で4班に分かれる。学校の特別な許可を得て、4日4回に分けて実施した。各班の人数は5人となり、自分が動かないといけない状況が生み出した。朝8:30に現地集合。早速、更衣して朝の会に参加。諏訪さんから職員の方に紹介され、5人の生徒も自己紹介と決意を述べた。その後、迎えのバスが出発。1台は乗り降りに介助の必要な方のためにその設備がある車であった。もう1台は普通の自家用車である。3人と2人に分かれて乗り、お迎えに出発した。1時間後に老人の方々が来所される。だいたい20名近く。車イスの方は生徒が介助して控え室までお連れする。早速、生徒は湯茶やお菓子で接待する。その間も笑顔でお話しをする。簡単な健康チェックの後、いよいよ入浴となる。男女別に二手に分かれ、さらにお風呂場と脱衣場に別かれて入浴の介助に入った。入浴後は髪を乾かしてあげたり、爪を切ってあげたり、靴下を履かせてあげたり、すこし、ゆるめのお茶を準備する。途中でお風呂場と脱衣場で交代し、全員が浴室で身体を洗ってあげること

を体験できた。20名近くの方のお世話をしていたら、あっという間にお昼を過ぎていた。控え室に集合して、昼食をとり、センターの方と介助の感想などについて会話し、お礼を言って、現地解散した。

## 4. 学習の成果と課題

体験新聞に次のような記述があった。

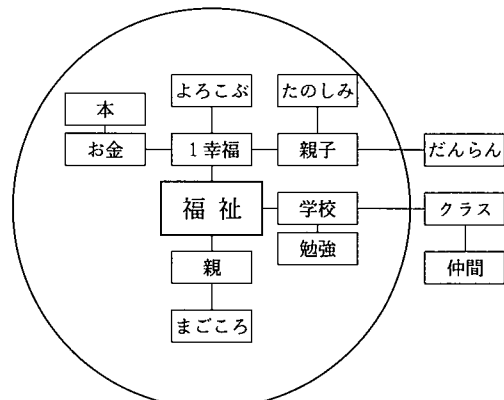
「私は、デイホームちどりに行ってお年寄りの方の乗った車イスを押しました。車イスを押している間じゅうおばあさんとお話しました。

「手紙などの書き方でマナーを学ぼうという学習で、マナーとかやったことはあるけど深くやったことはないし、手紙なんてましてやだめだと思いました。」

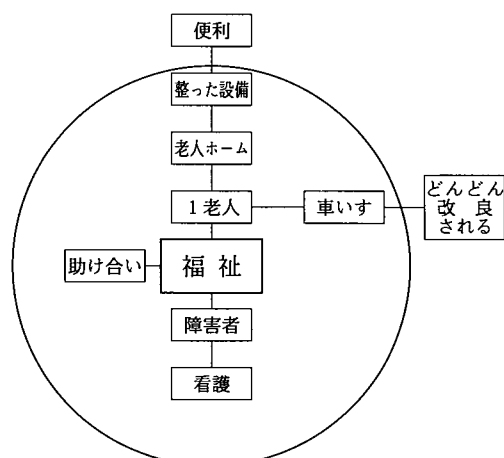
車イスの操作については介助のほうは全員が身につけることができた。手紙について、生徒の多くはこういうあらたまった手紙を書く機会が皆無に等しい。単なる練習でなく、実際の活動として、手紙を書く場があったことは大きな意味があった。第1の目標はほぼ達成できた。

次に、ある生徒の福祉に対するイメージマップの変化を紹介する。

### 学習前

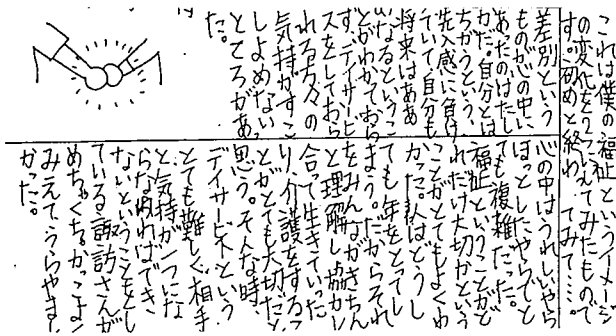


### 学習後



このように学習前は極めて抽象的・観念的なイメージがかなり具体的なものになる生徒が多く見られた。このことから第2の目標の前半部分である、老人福祉についての現状、問題点に対して、自分なりの考えを持つという目標は達成できたと考える。

ただ前の自分とは違う考えになったかどうかは個人差が大きい。福祉にたいしては今回の学習で、まず自分の考えをもったというのが現状であろう。生徒の体験新聞の中には過去の自分と対話してまとめようとしている次のような作品もあった。



次に第3の目標である福祉の必要性や意義についての考えを深めるについては、体験新聞のまとめからそれぞれの生徒が自分なりに深めたことがうかがわれた。深まったことを整理すると2つあるように思う。

そして1番嬉しかったのは一生懸命身体を拭いてあげたときに、「ありがとう」といわれたことでした。こんなことをするのは恥ずかしいと思っていた自分が恥ずかしくなっていました。

つまり、その1つは福祉の心として「他人の喜びが自分の喜びとなる」ことを実感できたことである。もう1つはさらに「相手の方にとっても喜びとなる」のがまた福祉の心であるということである。次の記述はそれに気づいたことを表している。

老人の方にそこは一人で大丈夫ですと言われた。私たちはお年寄りや障害のある方は何もできないと思いつているのではないだろうか。確かに困難なことや不自由なことは多いだろうが何もできないわけではない。私たちはその人が困っているときは喜んで手をかすべきだが、おもいあがってこの人は何もできないと思つてはいけないのだ。

今後の課題としては、こうしてやっと芽を出した福祉の心をどう育てていくのかということである。そのための学校・家庭・社会の役割についてどう考え、実際にどうしていくのか大きな課題がある。

(おくむら やすまろ・数学科)